

自然と教科書

物集高見著

全

校學館師範大學福岡

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

18 19

T1A1

11

Ko99t



和書 週



福岡教育大学蔵書

帝國文科大学教授物集高見先生著

てはを教科書全

東京書肆 十一堂發兌

てはを教科書

例言

一 此書も、余が、東京大學及び東京師範學校等の教授、常に用ひし筆記なりしが、いつしか、世間より流布して、漸く傳寫をなさねたりしとて、毎本、魚魯の誤り、勘みからぬを、此度より、華族女學校までも、用ひらるゝと聞きしを、さうぞと、思い起して、新しく添へも、削りもして、斯くも、上木せしなり、されども、やう、教授に用ひしものとも、自ら同じからざる所もあるべし。

一 てはををハ、既、本居翁の、詞の玉緒ありて、詳悉せりと雖

9075

例言

ども、玉緒も、本居翁の、新しき、ていつをも、法則あるを、發見せられしをもて、其説を、証明せんが爲め、古書に徴して、論辨せられしものなれど、直ち、其書をもて、教科の用ゑ、充てんとする時も、當は、卷帙の、浩瀚なるが爲め、多數の時間を、要するのみならず、論説の、高尚なるが爲め、亦、適當せざる所あり。殊も、其教科用ゑ、作られしものありざれど、教授上は、必用なる、順序と、方法とを、闡きしをもて、前後同様なる講義も、時々、せざる可しとて、煩ひありて、とみ、其要領を、得せしむること能ざる、憾みあり。されど、余が、今、此書を、専ら、教授の用ゑ、供せん、の目的

より、勉めて、簡約を守り、ていつをも、上の法則を網羅して、每章、一條の法則を説きつゝ、易きより難き、及び、低きより、漸く、高きに至らしめしむ。また、生徒の、記憶を易うらしめんが爲め、每章、其要領を細書し、其生徒の、既に記憶せりや、如何を、試みん料と、種々の、誤り歌をも出づて、教員に便せり。

一 余も、和文の教授も、其順序に關らずして、毎、ていつをも、をもて、假字づかひの科を卒りし、生徒に教へ、此も、當時、生徒の、國語全科を卒らず、半途にして、止む者多し、遂に、其徒勞を歸するを、憾み、先づ、此二科を、よく、のすさび

なり。且ら、假字づらひとてにををもと、和文學上、必用の科  
よて、此二科よ、通曉する時も、全科の過半を、卒らるるもの  
と、同等なる効力を、與ふれむなり。まゝ、余も、此書よりて、  
てにををも教授せしむ、毎ふ、二十四時間、乃至二十七時間  
を、要しるべき。

一書中、古言り、まゝ、古書の類ひもて、今多く用ひぬ、辭も、  
(一)を、かけて、其識とせり。(一三)の表中は、ある、(なも) (き)などの類ひの如し。

明治十八年十二月

# てにををも教科書

## 標目

- 〔一〕てにををも
- 〔二〕てにをものゝのへ。
- 〔三〕断る語、續く語。
- 〔四〕かゝりとなり、むすびとなる辭。
- 〔五〕たゞといふ、かゝり。
- 〔六〕ものゝがといふ、かゝり。
- 〔七〕のがぞなん(なも)かやといふ、かゝり。
- 〔八〕こそといふ、かゝり。

九 なにといふことを。

一〇 なにの下におくか、やとのけぢめ。

一一 かゝりの、三つのうち。

一二 三つのかゝりを結ぶべきこと。

一三 かゝりとむすびとの表。

一四 むすびも、いづくまでも結ぶ。

一五 かゝりの、一つの詞、複となりてかゝる例。

一六 かゝりの、いくつもあらざる例。

一七 むすびとして結ぶべきこと。

一八 むすびをなぶく例。

一九 結をぬかゝる。

二〇 むすびを接續詞としてくさるもの。

二一 言外、餘情をふくめてむすぶもの。

二二 つねに結び、かゝれるもの。

二三 二段三段の、むすびの意。

二四 むすびの、ところを切る。

二五 復習、もう、復習を用ふるもの。

二六 試験

てにをを教科書

豊後 物集高見 著

〔一〕てにをを

てにををを、いよゝゝ漢字をよむ便りよとて、  
其文字のすみぐゝ、のぐゝ、點をさして、其  
點、右よあれむ、ヲ、左よあれむ、ニ、カ、テと定め  
て、讀みよることあり。それを、ヲ、點とわゝり  
を、後ちよ左の下よりよみて、てにををを、呼び  
なゝり。もと、てにををを、ほりの詞よ、つけて

いふ、みどりき、一種の辭まで、其數あれども、うち  
まかせで、唯、てにををといふも、猶、彼の、四十七  
の假字を、いふはとのみいふ、類ひの如し。されど  
も、まゝ、さういふ、てにををの説も、其みどりき、  
辭のうへを、ひらつぐ、いふをあらす。其みど  
りき、辭よりて、他は、心へらひすべき、ひらや  
の、定まりあるを、いふなり。さて、其ひらやの定  
まりをむ、今も、てにををの、ごのへとをいふ。

(二) てにををの  
ごのへと

てにををの、ごのへとを、上はあらも、下は、  
辭は

あつて、下はあらも、さき、辭をさぐめ、上、下  
を、結び合を、するをいふ。さて、其上はあらも、  
辭を、かゝりといひ、下まで、結ぶ、辭を、結びといふ。

(三) きりぎりす  
つゞくこと

かゝりを、結び、つゞく、むすびの所も、そこまで、断る  
、ゆゑ、てにををを、おふも、先づ、始め、さき  
らき、詞、断る、ものと、續く、ものとの、あるを、知  
りて、さて、その、断れ、續きよりて、調ふと、調を、ぬ  
とを、知るべし。たとへば、(火もゆ) (雪もろ)と、  
いへば、其もゆ、あつても、そこまで、断るれども







(氷がとろる) (氷やとろる) といふ類ひの

ごとし。このののとがとる(六)より、ののとが

とよ、同じ。されど其用ひ方を重く用ゐると、軽く

用ゐるとのけぢめありて、重く用ゐる時を、こ

のよ、なるとなり。ぞと、なるとも、これと、強く、あさへ

ていふ時よつく。後撰(秋風よ、ささくれ渡る、鴈

のゆる)後拾遺(かゝるかと、雪居もろろよ、今日ぞき

火、ほのめうや、磯邊の松の折もよりうらむ) (なも

を、なんとといふ、ことむの、古言なり。萬葉十二(い

ずあるとを、あうねども、かと、やとをも、ともよ、

てこのぐら、恋ひの繁きも、新古今(妹なく、神な

美い心よ、いふ時よ、つく。い川上、影みえて、今か

さくらん、山吹のちを) 同(あなをうとを、今や但

別う、あまの河、川邊たちて、ふもなきなり) 但

、かも、やよりも、疑ひの心、あさく、大方を、然り

と、知るるづきほどの、所よりなり。

(八) ふ、か、こそとい

まゝ、名こととを、伐んと、割くと、下よ、こそ

さへ、こそ、たよこそ、よこそ、へこそ、よてこそ、てこそ、

うてこそ、てこそ、でこそ、つてこそ、もこそ、もこそ、

りとする、とあり。(氷こそとろれ) といふ類

ひのごとし。此も、これと、故やうなりぬ、い

ふ時よ、つけていふ。古今(雪ありて、年のくれぬ

まづも見えけれ

〔九〕 なにといふ

かゝりも右の外も昔よりなにといふなにと  
 の疑ひ辞もなになぞたれなにといふになにと  
 いふていふになにといふになにとの類ひをすべて  
 ふひらの詞をもまて、やかなどと同いふ  
 のかゝりと定あふれどなにの種類の、こと  
 も、代くことゝ副くことゝともいふべき詞も  
 やかとならぶべき詞もあらずまゝ此なにと  
 いふ詞の下も毎ふかといふてはをを辞あり  
 て〔七〕いふ〔七〕それやもてかゝりなれを其ひを

ふせううへも今もなにといふをを、あふさ  
 れど若くなにといふ詞の下みかといふ詞のな  
 きもあらむ、そのたぐの類ひとして、たぐの例を  
 もて、結ぶべし。（續後撰）なにぐとを、いふは思ふと  
 空穂物後鶴村鳥の巻（なにと）使かきうねの秋の夕暮  
 白雲を君しもよきよ、みちをなになり（赤染集）  
 秋もて、今もさうりの紅葉と、うづろふ菊と、  
 いづれまきあり（金葉）夏の夜の月（同）淡  
 の、てすさびふ、君も清水の結（同）淡  
 路島、のうふふ、の、鳴く聲、の、夜ね、めぬす  
 まの、國守、金葉、へ、長濱、の、真砂、の、教、も、  
 なに、なう、す、つ、ま、や、す、見、ゆ、君、が、ふ、世、哉、  
 とも、と、疑ひの詞もて、物事を、慥、り、い、を、ぬ、詞、な  
 れど、それ、よ、つ、く、づ、き、下、の、辞、も、自、か、ら、な、

らぬが、なんまゝなり。つゝことあるを、固よりのことなり。されど、其むすびの、かやなどと同

さまのむすびとなりぬるも、あれども、古今（い

あらど）身なぞも、あまのかる藤（よ）思

ひみづる、新古今（夏草も、あけり）けれど、

時鳥（な）宿（そ）も、すべて、同じ（か）心（こ）も、

ぞといふ辞（こと）を、むづけらなり。（時鳥（な）宿（そ）も、

いづも、ぞを、むづけらなり。（な）と、云（い）

せぬ。ぞといふ意（い）は、聞（き）くづき（き）歌（うた）なり。

か）と、やととも、疑（う）ひの、辞（こと）なれども、まゝ、ひと

つ、心得（こころえ）おぐづき、ことあり。なにといふ詞（ことば）の下

ふおく、疑（う）ひの辞（こと）も、必ず、かといふべし。やとを、

いふべからず。古今（こ）世（よ）の中（なか）を、なにかつねなり、

ふな但（ただ）し、かやとつ（つ）いける、辞（こと）もあれども、拾（ひろ）遺（い）

かや、草（くさ）のす（す）ぐ（ぐ）と、おもほえて、此（こ）か、よ（よ）つき（つき）と、

あや、く（く）花（はな）の、名（な）を、忘（わす）れ、此（こ）か、よ（よ）つき（つき）と、

やと、なげき（なげき）辞（こと）の、やと、疑（う）ひの、辞（こと）の、やと、ありず、

まゝ、なと、なぞといふ、詞（こと）の下（した）も、やと、おくこと

あり。千載（せんざい）へ、なと、やと、か、さ、も、う、れ、か、き、大（おほ）空（そら）ぞ、

おほ、う、さ、な、つ、こ、と、も、あ、り、と、あ、ら、ず、や、後（のち）撰（せん）へ、

らむ、む、う、し、の、つ、ま、と、人（ひと）は、語（かた）ら、む、か、さ、れ、ど、こ、の

なと、を、な、に、と、の、物（もの）な、れ、る、詞（こと）な、を、な、に、ぞ、の、物（もの）

ま、れ、る、詞（こと）も、て、其（その）な、に、も、既（すで）と、と、を、断（ことわ）れ、う、る、を

と三四の末、まゝも、ぞ三と、りふ、むすび。下二  
 いへるう如し。まゝも、ぞ三の表より、りふ、むすび。  
 ゑみ。かゝりて、さて、やも、かゝるなれを、唯ひ  
 とへふ、やも、かゝるとも、異なり。まゝ、いつくぞや  
 なとの、やも、拾遺、いざりせし、蟻の教べし、りぐく  
 なけき、辞の、やもて、いつぞやなどの、やも、源氏物  
 の巻へり、りぐく、やも、花のさけり、ひとめ、談、總角  
 君、木のも、とさへ、や、あきもさびしき。この  
 なれども、既、ひとらの、翻、うとを、ななり、これ  
 も、亦、異なり。翻、うとを、なれり、なにと同  
 し、戦ひも、りつぞや、などの例を、りて、結ぶ。但、同  
 のこと、下二六の末、いづると、照し、合せて、此、例  
 く、心得、おく、下二とも、すれを、思ひ、辨むる、ぞ、ひ

〔二一〕かゝりの三

上より、る、たぐ、も、ものが、ぞ、なん、(なも)か、や、こそ  
 を、其、重きと、輕きと、よりて、三つ、より、り、たぐ  
 も、ものが、を、一段とし、の、が、ぞ、なん、(なも)か、や、を、二  
 段とし、こそを、三段とし、さて、一段のかゝりも、一  
 段のむすびを、りて、結び、二段、三段の、も、二段、三段  
 の、むすびを、りて、結ぶなり。但し、の、と、が、と、を、七  
 より、る、ごとく、其、重く、用ゐると、輕く、用ゐると  
 より、りて、一段ともなり、二段ともなりなり。

〔二二〕三つのかゝりを、結ぶべきことを。

一段のかゝりを結ぶも、皆断るゝこととて、  
火ゆ（雪あ）などいふゆありの  
類ひの如し。二段と三段とを結ぶもすべて續く  
こととて、二段のを結ぶも、名とては續くべ  
き、續きよて、形容詞となるゆ。（ゆる火）  
（あけ雪）などいふゆるあきの類ひの  
ごとし。まづ、三段を結ぶも、むともといふてに  
をも辭と續ぐべき、續きよて、むともは續きて、  
けとなり、またも。（火ゆれを）雪あけ  
れど）などいふゆれあけれの類ひの如し。

三つのかくりと、三つのむすびとを、むくく合せ  
て、其かくり結びをみる時を、次の表の如し。

さまことゝん の、すゝらま	さ し き	さ し き	さ し き
過去のでん をも。	き し	き し	き し
うちけーの てはをん。	ず ぬ	ず ぬ	ず ぬ
るご詞のきり の、すゝらま まゝ過去現在 のでんをも。	り る	り る	り る
れ	ね	ね	ね

ていそ詞の変  
りのそら  
さ、おひ上  
下二段のそ  
たふき、ま  
過去のに  
をえ

う	く	す	つ	ぬ	ふ	む
うをのへる ゆ。	くをのへる ゆ。	すをのへる ゆ。	つをのへる ゆ。	ぬをのへる ゆ。	ふをのへる ゆ。	むをのへる ゆ。
う	く	す	つ	ぬ	ふ	む
うれ	くれ	すれ	つれ	ぬれ	ふれ	むれ
う(得)する(居)る(蹴) う(積)飢(の)たる(ひ)の そらき	く(来)かく(掛)う(受) あ(起)の類ひのそらき	す(為)のす(載)やす(瘦) よ(寄)の類ひのそらき	あ(落)すら(捨)る(恥) と(閉)の類ひのそらき	ぬ(去)たる(死)かぬ(兼) を(重)の類ひのそらき	ふ(經)る(戀)のふ(延) す(總)の類ひのそらき	む(恨)とむ(怨)ほむ(譽) む(覺)の類ひのそらき

ていそ詞の四段  
のそら  
ひ上下一段の  
をえ

ゆ	る	く	す	つ	ふ	む	る
ゆをのへる ゆ。	るをのへる ゆ。	くをのへる ゆ。	すをのへる ゆ。	つをのへる ゆ。	ふをのへる ゆ。	むをのへる ゆ。	るをのへる ゆ。
ゆ	る	く	す	つ	ふ	む	る
ゆれ	るれ	くれ	すれ	つれ	ふれ	むれ	るれ
あ(老)まゆ(消)る(越) た(絶)の類ひのそらき	か(枯)くる(暮)たる(流) さ(忘)の類ひのそらき	ゆ(行)なく(鳴)あ(吹) ま(聞)の類ひのそらき	ま(増)た(為)あ(推) か(貸)の類ひのそらき	た(立)ま(待)う(打) か(勝)の類ひのそらき	お(追)あ(逢)ゆ(結) く(乞)の類ひのそらき	す(住)く(汲)つ(摘) う(倦)の類ひのそらき	ふ(降)つ(釣)ち(散) な(成)きる(着)け(蹴) のたる(ひ)のそらき







そ、名ととも、の下よつき、古今（まがねふく、吉備の中、あひよせう、

ほを谷川の、音か、を、のさやけさ、の、下よつき、後撰（

ふ、まらてぞ、の、ちりなま、心づらふ、縁ちふがうき、

一、三段の、か、りを結ぶ、きも、けれの修らよ、書きうき、ま

詞の、ま、らき、の、よき、あ、き、と、いふ、き、よて、此

きを、よて、三段を、結ぶ、も、あ、き、詞づ、ひ、の、上

の、こ、と、よて、つねの、こ、と、よて、あ、ら、ず、萬葉十一（を、

人、あ、び、た、く、屋の、す、れ、と、おのが妻、を、と、と、珍ら、き、

一、ま、一段の、むす、び、の、下、み、な、く、ら、く、さ、く、も、く、  
ま、と、ま、あ、げ、う、を、ぬ、る、す、ふ、む、な、を、の

べ、う、詞、よて、ふ、ら、き、詞、づ、ひ、み、多、く、用、あ、る、

め、の、ち、う、が、（た、く）萬葉十一（春の雨、い

な、く、い、と、り、か、み、あ、る、ま、梅、の、花、の、ま、さ、う、

び、き、の、山、田、あ、る、翁、の、わ、く、蚊、火、の、あ、さ、く、れ、

の、み、う、か、く、ひ、を、り、く、同、四（神代より、云々、

あ、う、つ、り、く、も、長、き、こ、の、夜、を、同、十（天の

河、あ、さ、や、み、ほ、り、君、が、手、を、い、う、ま、う、ね、を、夜、

の、ふ、け、ぬ、り、く、同、三（見、う、せ、む、明、石、の、浦

よ、も、ゆ、ら、火、の、ほ、み、ぞ、り、で、ぬ、ち、妹、よ、こ、う、う、

同、十（春霞、な、き、び、く、た、あ、ま、い、ほ、う、く、秋、田、

か、る、ま、で、思、う、も、む、り、く、（さ、く）同、十（あ、ひ

思、う、ま、あ、る、ら、ん、ふ、ゆ、を、お、の、緒、の、長、き、春、田、を、

あ、ひ、ひ、ら、ら、く、（さ、く）同、二（み、よ、野、の、

すびは用ふべきことをもすべて一段のむす  
びとならなり。

一また一段のむすびの下は傍假字をめて書き  
さらし其かゝるも三段のむすびと用ひさま  
なれども、三段の行は鳴け、吹け、命令の意は用  
ふる時も、一段のむすびとなるをめて、故さら  
し、別はあげらるなり。古今の花の色も霞も  
はぬすめ、春の山風も同く花の色も霞もさ  
りて、みえずとも、香をふくむ、人のあるべし  
「一四」むすびをいふ  
かゝりを結ぶも必ずそのこといふ、ひとりの宣まれ

る所あるもあらざる。いづれもあれ、其意のお  
ちつく所まで結ぶべし。されむ下まで結ぶるも  
あり、拾遺は春霞をみれむ、あらけり上は  
て、結ぶるもあり、元真集は咲きよりけり山  
と見らまゝ中まで結ぶるもあり、古今は春霞か  
雁かねも今ぞなく  
「一五」秋露の上より

「一五」かゝりのひとりの詞は、  
かゝりのひとりの詞はかゝるも必ずひとりの  
みと限らるるもあらざる。いづれも、複なること  
あり。然らば、かゝりの複なりて、ひとりの詞は



其時を、かりりあらぬを固より、結ぶべき限り  
もを、あらぬを、悟るべし。まゝ、二段の、かやも、稀  
も、形容をいふ詞も、含まうことあり。(此文を、  
いつか見う、文なり)(此歌も、いうよぞやあ  
る、歌なり) 後拾遺(近江より有りといふなり、  
沼といふ類ひの如し。)

〔二七〕むすびとして、結ぶべき詞も、上より現るる、か  
りの、必ずかりるべき、詞なれど、古今へ木の、下露

萬葉二(曉露、我) かきちぬれし ちくらぬ詞をむて、結ぶとい

ふも、更なれども、(紅葉を、さくら嵐の、もらふら  
ん、この山本を、雨とふらなれ) とを結ぶべうら  
ず、此歌の、らそといふ、かりも、をらふといふ、詞  
もを、かゝれども、ふるなれもを、かゝらず。此こ  
ろより、よく、味をひ知るべし。

〔二八〕むすびを、  
もぐく、例。

歌、まゝも、文のうへみて、時として、其むすびを、省  
くことあり。さるゝ、其むすびを、省くも、種々の、  
仕方ありて、一様ならず。先づ、第一も、かりの  
辭を、やがて、其とぢめとして、省くものあり。徒然









秋老變以

花の咲くをまつ

古今の時の意

あれ、秋やも人よ別らづきあるは花の咲くか  
を見るに戀ひさめのを世の中にあら  
まゝる「嘆く事」が「の意拾遺」一季が多くな  
りにけ此も其ころあらず上と全く異なれを  
思ひまがふばかりず。

言外に餘情をみ  
めて、むしろあ  
の。

らうぞの外は、餘情をふくめて聞かしくむる爲め  
 心をまゝとつゝはひかけて結ぶものなり。但  
 おほくは歌をよかけて結ぶものなり。なほも  
 のなみの意は聞かえ、古今へつひは行く道ともか  
 ねて聞きしかど、きのふけふ

とを、おめを  
かりしを

7  
よ  
か  
け  
て  
結  
ぶ  
る  
を  
。○  
。○  
よ  
。○  
。○

なるよ、○のかな、○なるかな、などいふ、嘆きの  
意よ、きこゆ。古今（梅が枝よ、来ある鶯、春か）な  
ほ、次の表を見るべし。

一段と三  
段とをむ  
すふ。

を

古今（夏の夜も）宵なほあけぬを雲のわらふ月ぞとて  
續古今（下よくて人の心も）後ろよを遙く見せし山がくさかな  
五社百首（夢さるを都の事も）見へきと神は賦くすちの老ほかま

一段のみ  
をむすぶ。

?

古今（宿りせしふかみ藤袴、忘られがき、春ふもひ）  
同（山櫻、ふみふれん、春霞峰、うも尾、まちかく）  
拾遺（梅の花、春よりまき、咲きかみ、み人辨、雪のふり）



となぐ、唯、二段三段も一段よりも重く、ゆふの  
みと心得べし。たとくむ、(夕顔も、花ぞ白き)(雨  
も、今こそ晴れしか)といふも、其意味も一  
段のたいようつゝて、(花白)(今晴れき)  
と聞きて、唯、たいの重きなりと、辨まふべし。

(三四) むすびのそ  
らちと、ゆふ。

むすびの所を、すて、そとよて切し。ゆふ、次  
よ来る詞もつづかず。されど、むすびの所より、  
次よ来る詞も、つづけんとするも、必ず、とい  
ふ、ては、をを辞をもて、承けてのちよ、續らるゝと

なり。古今一春や、とき、花やあそき、と、聞き、  
は、おく白露を、げき見れを、玉、されど、と、切  
や、あけしと、おとろかれ、つ、されど、と、切  
れ、るゝあ、ら、で、承、く、つ、ら、るゝ、と、ら、り、を  
も、悟、る、づ、し、但、し、と、よ、も、ひ、ら、の、用、ひ、ど、ら、あ  
興、字、の、意、は、用、ふ、る、時、を、較、べ、て、り、ふ、時、ま、た、及、字、  
き、と、賤、き、と、用、ふ、る、の、如、く、切、れ、ぬ、を、承、け、る、や、  
る、事、あ、れ、ど、も、此、を、ま、た、と、切、れ、ぬ、を、承、け、る、  
人、と、知、ら、ぬ、人、と、の、意、は、貴、き、と、賤、き、と、知、ら、ぬ、  
一、貴、き、人、と、賤、き、人、と、の、意、は、貴、き、と、知、ら、ぬ、  
ど、の、下、も、各、詞、の、あ、る、づ、き、を、省、き、た、る、ゆ、の、な  
見、る、此、類、ひ、の、と、名、詞、を、承、け、る、り、と、二、段、の、か、り、の、か  
ま、な、り、但、し、一、段、の、か、り、と、二、段、の、か、り、の、か  
と、や、と、も、(一六) といふ、如、く、時、と、て、も、形、容、を

いふ、詞の中は含まらるゝことあれど、形容をいへる所、いくらぬ所を、よく考へみて、思ひ置きまふべし。

〔三五〕 復習、また、復習よ  
ゆくりあり、あり。

よよいくら、てはをものごころを、猶よく知らんとせむ、復習といふことをすべし。復習とて、歌にもあれ、文にもあれ、あるが儘よ、取りかへて、其てはをものよりあつて試みかへり、上より、つぎより、言ひ来られる、ことどもを、更に幾度ともなく、繰り返す、志ありたり。てはをを、學むんと

する者も、常は此あつてを用ふべし。然る時も、全くよく、てはをを、通曉するものなり。

復習の爲めは、歌文を試むるをも、識を用ふべし。先づ、かゝりの識と、むすびの識とよそ、の識を用ひ、かゝりむすびの、関係の識とよそ、

を用ひ、むすびの下の、切れたる識とよそ、を用ひて、其ごころと、ごころのくらぬとを、上の説どもよ、照らし合はせて、知るべし。今、此あるの用ひかゝるを、知らせん爲め、次は、用ひ試みたる、例をおぼせり。

○かゝりのたゞなる時もむすびの識  
いと切れうゑ識とのみを用ふ。

古今「夜を寒みおく初霜を、拂ひつゝ草の枕ふあまうびねぬ」

金葉「みむら山紅葉ちうら」旅人のすがの小笠ふはきおひかく

古今「有明のつれなきみえし別れより曉ぬかり、憂きものをな」

同「年の内ふ春を来まけり」ひとやを去年とやいそん今年とやいそん

同「駒なべていざ見よゆかん」故郷を雪とのみこそ花を散らうめ

同「奥山ふ紅葉ふみひけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋をかなうき」

新葉「影はほろ霜夜の月ぞ秋をなきて時をあらとちやけかりけり」

〔二六〕 試験

上よりつぎへよ言ひ来しけることどもをよ

く明らめ得るらんも下よ出でせら歌とももの

調くりやどりのいらずやも自りら知らるづき

くくりなりされむ其明らめ得るう明らめ得

ぬりを試みんと思ふ其人よ下よ出でず歌ど

もを示してかゝりむすび所々の識をつけ

めまゐ其よりあゝの道理をも記さうむべし

さて其答へのうへよて學びの成れるもまづ

しきも力の重さも軽さも隠さくまなくあら

そよ知られなんものぞ

試験は用ふべき歌ども

先づとも、さうも同じ、夢の世よそは驚く身よりかはなま、  
覺るが、山かげの、夕やみと、秋よりさきよ、かねてすゞしき、  
みづゝ雪の、山の白雪、ふみまげで、いりまゝの、音づれもせぬ、  
ふたつある、心をくれも、あたりけり、うゝと思ふよそも忘れぬ、  
是列の、山ほら、まゝす、のみならず、大方鳥の、聲もまゝこそぬ、  
秋の、せふ、まゝつむの、聲もまゝ、くれと、行きて、いづれづらとん、  
鶯の、むらゝを、いひて、まゝづらと、つたふ花の、色やあせり、  
花薄君が、方よぞ、なびくめり、思ふね山の、風もふけども、  
宿よゝて、錦と、みまゝ、うれゝと、まゝづらと、本の、数ゝゝを、まゝ、  
霞むより、雪路よの、みも、聲もする、澤辺の、鶴も、野べの、雪雀も、

秋山の紅葉が、て、て、を、れ、朝も満ち、い、ま、鏡うなぐ、

別れても、昨日、今日こそ、隔てつれ、千代も、つゝ、心持のみする、  
谷川の、流れ、清く、すみぬれ、まゝな、き月の、影うかびぬる、  
萩の、葉よ、こゝふ人も、なき、のを、来る、秋こそ、みまゝと、答ふも、  
いと、まゝ、虫さうらゝも、浅茅原、たき、添か、露の、夜寒か、かねて、  
木の、間より、風は、まがひて、降る、雪を、春といへむ、花うとぞ、見ゆ、  
てが、心、春の、山辺よ、あゝが、れて、な、い、く、目、を、げ、か、くらゝ、つ、  
初雁の、夜深かり、つゝ、聲よ、より、けさ、佐保山も、思ひやらるゝ、  
や、く、風や、空より、知らず、吉野山、雪よ、あ、ま、づ、る、花の、ま、ら、ゆ、ま、  
こゝ人も、なき、山里の、あ、な、づ、ふ、ま、い、の、まゝ、よ、ま、づ、り、こ、ぞ、ゆ、く、

人忘れず春をこそ侍つ拂ふべき人なき宿ふふれる白雪、  
秋もてゝものをこそ思ふ露かゝる萩のよふく風よつけても、  
けふよりを枝こそたゞ思ふ菊の葉も夕露をけふもあふりぬ、  
露なもて雁ぞ鳴くなら片岡のあしたの原を紅葉ぬらぬ、  
惜むより花のちらずをけふもたゞ春ゆくこそよそよそなま、  
久方の月の桂もなるとばかり家の風をぞ吹かせてゝむな、  
白雪のゆくべき山もまだまらざる思ふ方よぞ風もよそな、  
○次よはづせむともて尋常のよりも其あや  
まりを見いさすこといふはかゝるるべし

〔一〇〕よひくるもの

いづこやいづこを宿をかり夜田もゆふれの峰のあらゝよ、

萬代を春の子の日よ出で見ん松を幾度おひやかともて、  
あちこちて幾日や経ぬる夏川のよりの糸のさふれのそら、  
春毎よ心をあむる花の枝よ誰がたはるりの袖やふれつゝ

〔二三〕よひくるもの

春日山をへの雪もきえよけり麓の野への苔菜をぞつめ、  
白雪のゆくべき山もまだまらざる思ふ方よそ風もよそふけ、

〔一五〕よひくるもの

夏の夜もすゞかりける山川ぞ波の底も秋ややうれも、  
軒端なる木の葉の色もねそけれど秋や外山の風を身まむ、  
あけすがそおちどなれも寝るねどみりや昔の影を忘れぬ

夏はつる賀茂の河原のみさきいそ神やうらぬ秋風の夢  
これこそやみぬ人戀ある病ひすれあひたうてそやち藥なし

〔一七〕よりくさぬの。

逢ふことも夢よのみこそちらひ来てうつともなき今言たうけれ  
思ふこともねえちまげー呼子鳥志のの森のがつゝ鳴くなら  
身のをを忘れ草こそ岸よあるうづ住者とあまよりひけれ

〔二一〕よりくさぬの。

田子の浦ゆうちきく見れぬまゝろくま富士の真峰よ雪をふりつゝ  
梅の花はさよりさきよ雪きーかどみる人まれゝ雪をふりつゝ

〔二四〕よりくさぬの。

もいほやく螢のすさみの蚊やり火もつきてやたてぬ煙うなるらん  
侍てといひ秋もなうもまなうぬをたのめおきー露もいうまど  
旅人のたぐ火とみゆる螢こそ露もや消えぬ光りなりけれ  
琴の音よひきかへる松風をまらべてや鳴く蟬のあうかな  
ふるやーへゆー人あらむいづてんけふ鶯の初音きーと  
一聲よあうともいけどばいさきまはる夜は月よ鳴くたり  
ゆさしもへさしもみえておーじまの山の入すめる月かな  
たよりあらむいけど都よ告げやらんいふ田河の関をこそーと

てにをを教科書終



孝和書

筆工 半山政太郎

東京京橋南橋町一丁目番地

鐫工 大谷信夫

東京本所三笠町五十四番地

明治十九年八月三十一日版權免許  
明治十九年十月 日出版

定價金拾五錢

著者 物集高見

東京本郷區弓町二丁目廿八番地

發行兼  
印刷者

長谷部仲彦

東京中區銀座二丁目十三番地

版權  
所有

發行所

十一 堂

全所